# あすの住民活動賞に

## 横越下営農集団が受賞

（共同防除を行う下営農集団）

県新生活運動協会と新潟日報社主催で、第三回「あすの地域社会を築く住民活動賞」のコンクールが行われ、横越下部落営農実践集団の〝共同作業による地域づくり〟（執筆者社会教育主事泉沢宏一）が、新生活運動協会賞を受賞することになり、表彰は十一月下旬県庁で、行われます。

「あすの地域社会を築く住民活動賞」は、ひとりひとりが、共に豊かな生活を築きあげるために、地域の人びとの生活を阻害している問題、あるいは、向上をはかるための今日的問題を、地域の人びとが、主体的に共同し、対話を通して解決している活動集団を、広く発見して、これを、推奨するというもの。

受賞の横越下部落営農実践集団は、昭和四十一年から、農業の生産性向上、生産の拡大など、農業の経済的側面の近代化をはかってきました。

そして、昭和四十三年には明るい村づくり推進事業の実践地区に指定され、農村の生活環境の整備など、社会的側面の近代化を意欲的にとり組み、「生産と生活の調和」のある地域づくりを行っています。

同部落は、早くから農作業の共同化を行ってきました。しかし、稲作と酪農の複合経営が多く、また、日稼ぎも多いため、複雑な収入構造が労働へのシワ寄せとなっているため、他地区に比較して疲労の蓄積が多い。

そこで、営農実践集団は、労働と疲労の関係について、調査を行うなどして労働の改善をはかってきました。

作業間に休息をとる。作業間に体操を行う。他部落と労働交換を行う。休日を設定する。共同給食を実施するなどがそれであります。

一方、農作業面においては催芽から防除まで共同作業を行っています。しかも、そのことによって、酪農振興にも力を入れることができました。

また、地域づくりが縁で、長岡市福戸町との姉妹部落を結び、交換研修をするなど、意欲的な実践活動が行われ、各地から注目されています。

今後の課題としては、春作業から秋作業までの共同化と酪農の経営規模拡大で、営農実践集団では、地域ぐるみの活動と課題解決に張りきっています。

# 村民大運動会

## 小杉学区が栄冠

十月十五日は、すみきった秋晴れで、絶好の運動会日和、第四回村民大運動会は、横越中学校グランドで開催されました。

中学生のブラスバンドで国旗、村旗を先頭に各学区の入場行進。

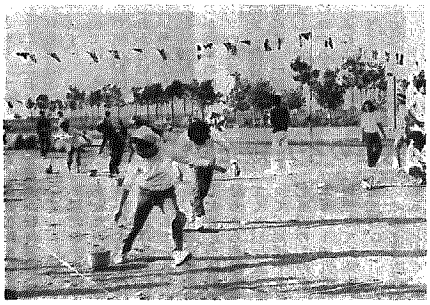
大会会長の神田村長のあいさつ、佐藤村議会議長、石塚県議会議員の来賓祝辞のあと木津学区代表宇野等君の力強い選手宣誓が行われ、競技が開始されました。

ピンつり競争、玉入れ競争アベック競争など、十五種目に、子どもから老人まで千数百名が参加特に今大会は壮年男子の参加が多く、例年にない盛会な運動会で熱戦がくりひろげられました。

学区対抗競技では、木津学区と小杉学区が終始接戦していましたが、最終種目の男子リレーで、小杉学区が一位となり、木津学区に逆転して、初の栄冠を獲得しました。

成績は次のとおりです。

①小杉学区　一二二点
②木津学区　一二〇点
③横越学区　一〇〇点
④沢海学区　九六点



# 家庭教育 ⑤

## 父親の役割

現在の子どもたちに、「父の厳信」をきいてみると、「おとうさんは、やさしすぎる」「ものわかりがよい」「頼りがない」といいます。

一方、おとうさんたちに、同じことを聞いてみると「がんこだった」「厳格だ」「こわかった」といいます。

この両者のことばには、相反するものがみられ、これはかって、家内労働がおもで父子の接する機会が多く、労働を通じて父親の子どもに対する教育活動が行われてきました。ところが現在では、下宿労主といわれるように、父親が外に働きに出ているため、子どもと接する機会が少なくなり、教育上の父親の座が家庭から失われてきました。

そのことが、子どもに精神的不在をもたらしたといえます。また、核家族のため、過保護な思いあやまったしつけ児童期から青年期になるにしたがって、父親の責任と役割は、次第に重みを加えてゆくものです。

ところが、最近、父親の権威がなくなったとか、父親は教育上の不在者であるとかいわれていますが、ほんとうでしょうか。

## やさしすぎるおとうさん

### ときには厳然とした態度も

父親というのは、兄弟げんかをしている子どもに、「こらっやめんか！」というひとことが、万金の重みを与えます。同じことを母親がいっても、父親のように響かないから不思議です。

また、近所の子どもと、けんかをして泣いて帰ってくると、父親は、「敗けて帰ってくるやつがあるか！」と、子どもの将来の生き方を教えていきます。母親は、どうでしょう。「こんなに服をよごしてしまって、家でおとなしくしていなさい」という。これでは、「子どもの教育」にはなりません。

父親は、ふだん、あまりしゃべりたがらなくとも、ときおり、子どもに話すことばが子どもの心にズシーンとひびくものです。

父親の愛情は、母親のように、日常的、生活的な内容でなく、断片的、強度的、固執的で、ときには、感傷的、感激的、抽象的であったりするものです。

ふだんは、口数も少なく、喜怒哀楽を強く現わさない。小さなことに無表情で、無感心で、頼りにならないでどがされてきたようです。

しかも、子どもの権利意識のめざめ、母親の社会参加が多くなり、それらのことで、父親の権威が失われてきたといわれているようです。

子どもにとって、父親は、男らしい父親、働く父親、人間味あふれる父親、たくましい父親、頼りになる父親を強く望んでいるものです。

こかに、偉大性があります。父親の生き方を批判するのは、その妻よりも、子どもであります。子どもの純粋性と正義感をもった評価は、父親を、親というよりも、ひとりの人間として理解しようとするからです。

従って、父親の生き方、生活態度が子どもの人生哲学になり得るものです。

そこで、父親は、子どもに対して、どのように望まなければならないでしょうか。

(1)物事の善悪や、事に当っていろいろ判断できる人間づくりの指標を。

(2)ふだん生きた言葉を子どもに与えてほしい。

(3)一つのことを忠実に精一杯生きてゆく姿を見せてほしい。

(4)自分の一生が、子どもに対しても誇り高く、赤裸々に語られるものであってほしい。

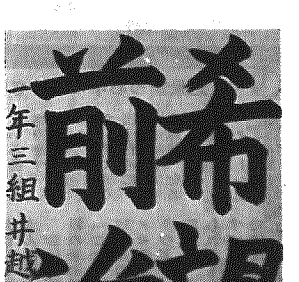
# こどもサロン

横越中学校一年一組 田中栄作君

〈評〉

〝生活をかく〟という題材で友だちを描いてみました。一生けん命授業に取りくんでいる級友の姿が生き生きと表現されています。人物の遠近感の表現、髪や制服の質感、教室内の雰囲気などじっくり鑑賞してみましょう。

（横越中　神田節子先生）




横越中学校一年三組 井越千恵子さん

〈評〉

全体として、まとまりのある落ちついた、ふっくらとした字です。点画を見ますと、横画の筆づかいはいいようです。しんにょうにのっている「隹」の部分が、いくぶん大きすぎました。しんにょうについては、前の部分を前傾させることと、終筆の部分は、しっかりとめて払うこと、しんにょうの練習が大切です。題字に比べて、名前がちょっと貧弱になりました。一工夫を。

（横越中　稲葉孝之先生）

## 輝く一九七三年を語る

### 原稿応募について

六月、村だよりと、公民館報が一本化されてから半年たちました。

その間、村民にしたしまれ村民の声を聞く広報にしたいと努力を重ねてまいりました広報係では、いま新年特集号の発行にとりくんでおります。

次の内容の皆さんから投稿いただき、記載したいと考えています。多数投稿くださるようお願いします。

内容

〝輝く一九七三年を語る〟

①一九七二年はあなた（または家族）にとって、どんな一年であったでしょうか。

②一九七三年は、あなた（または家族）にどんな年であってほしいでしょうか。

③横越村の将来について、あなたの考えを聞せてください。

○字数、四百字詰原稿用紙一枚程度

○〆切り　十二月十日

○送り先　横越村公民館に。